



TITLE:

明治初期を中心とした福島縣の水路交[通](一)

AUTHOR(S):

安田, 初雄

CITATION:

安田, 初雄. 明治初期を中心とした福島縣の水路交[通](一). 地球 1935, 24(6): 468-475

ISSUE DATE:

1935-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184507>

RIGHT:

明治初期を中心とした福島縣の水路交通 (一)

安田 初雄

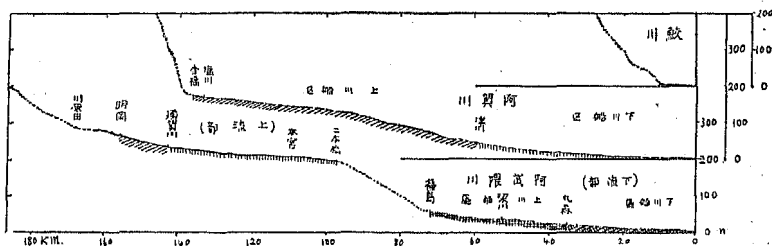
一、船 路 (註一)

阿武隈川・阿賀川及其等の支流は猪苗代湖と共に明治初期に於ける福島縣内の主要な水上交通路であつた。外に鮫川下流も利用されたかも知れぬが、未だ決定的な資料は見えてゐない。

(1) 阿武隈川 川口の宮城縣荒濱から角田盆地の丸森までが第一區、丸森から阿武隈高原を横切つて福島盆地の福島までが第二區、以上を合はせて下流部船路とし、順次に下川船區、上川船區とする。此の可航限界點は福島である。福島南部伏拜^{フシカ}附近からは、二本松の東部まで川身は阿武隈高原に陥入し、蓬來岩・稚兒舞臺附近の急湍深淵を造つて二十數軒の間不可航區をなして

ゐる。上流部船路は二本松東方の太平村^{タツノムラ}供中から須賀川町北の中宿^{ナカノリ}まで、更に中宿から現在の西白河郡三神村^{ミヨウシ}明新^{ミヨウシン}——當時の明岡村^{ミヨウカ}と新田村とを合併したもの、川港は明岡にあつた。——までの二區に分けられる。明岡の南は川床に岩石が亂立してゐること、川身が略等水量の二川に分れてゐる爲に水量急減すること等の爲めに明岡が可航水路限界點をなしてゐた。もつとも更に上流でも筏流しには利用された。此の上流部船路中須賀川中宿から明岡までの間には乙字瀧があり、遡航は容易でなかつたが、左岸に近く巾三米ばかりの堀り割を造つて船を曳き上げる等の特別な勞作が必要であつた。又供中、須賀川中宿

圖一第



間の船路よりは急傾斜で水量が少い等に依つて、明治初年一寸航行に利用されただけで、明治十年代からは稀に利用された位のものである。下流部船路と雖も人工を加へずには全部を利用し得なかつた寛永の末に代官古河重吉(註二)、寛文十一年に河村瑞軒等が川浚を行つたのは其の主なるものである(第一圖參照)。

註一 安田初雄 近世に於け

註二 宮下喜佐次 瀬上郷土
 育 和八年三月 福島縣教
 る阿武隈川の交通 昭

宮下喜佐次 瀬上郷土
教本第一輯 昭和六年
二月

明治初期を中心とした福島県内の水路交通

(2)阿賀川　會津平の鹽川及金橋以下川口まで連續して航行可能である。金橋より上流は猪苗代盆地と會津平間の急流にかゝるので航行不能である。可航區間中에서도越後山脈に對し先行性流路をなす、津川より上流は遷移點が數個所に認められて、津川以下の船路とは自ら別區を造つてゐる(第一圖參照)。支流只見川は南會津郡宮床に遭運注繼立所があつたから、可航水路として利用されたいが未詳である。

明治十三年 福島縣統計

(3) 鮫川 川口から石城郡田人村井戸澤まで遡航出來た。其の北瀧富士附近に大瀧があり、鮫川の流路中最下位の遷急點をなし可航限界點になつてゐる(第一圖參照)。

註一 三藩よりの願書 明治四年 平潟湊より上田川筋

小川村通迄船積に仕り夫より陸路八里程牛馬にて□
明岡村に出、同所河岸より船積に仕り候へば賃銀半高
に荷着に相成」文中上田川と云つてゐるのは鮫川の事
で、植田附近を経て海に注ぐ故此の名で呼んだらしい
が植田近邊の人は鮫川とのみ呼んで、上田川とは云は

ぬと云つてゐたが、平潟では鮫川を上田川と云ふと聽取した。(昭和十年八月の巡檢に際して)

(4)猪苗代湖 深度が充分あるから船着場さへあれば如何なる方向にでも航行出來たが、湖脚翁澤から壺楊・山濁・濱路・舟津等へ通ずる航路が主要なものだつたらしい。

第一表 下川船區の川港

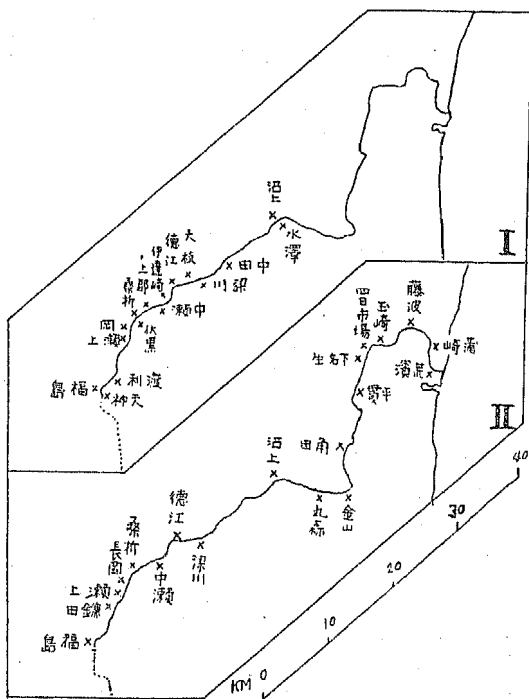
(明治十四年)

港 名	現在位置
荒 濱	宮城縣亶理郡荒濱村
蒲 崎	〃 名取郡玉浦村
藤 波	〃 岩沼町
玉 崎	〃 千賀村
四日市場	柴田郡槻木町
下名生	〃 船岡村
平 貫	伊具郡東根村
角 田	〃 角田町
金山	〃 金山町
丸 森	〃 丸森

註 金山を原町臺町とも云つた。

第二圖 阿武隈川下流部の川港

I 寛文年間河村瑞軒の依る
II 明治四十年



二、港

川港・湖港も時代に依り、名・位置・數等に變化を來たした。

(1)阿武隈川 下川船區(第一表參照) 荒濱は荻濱・石巻・平潟等と併んで東北日本太平洋沿岸の重要港であつた。阿武隈河谷北部を主な後脊地

としてゐた。千石積の親船が入港し、江戸深川への回漕米を此處で検査して、それに積みかへた。間屋も數戸あり阿武隈川港として最も繁盛

第二表 上川船區の川港

(明治十四年)		(寛文年間)	
港名	全上	現在	位置
沼上	水澤河岸	宮城縣伊具郡丸森町小倉の西方	水澤・沼上河岸 よりの川路距離
梁川	沼上河岸	大張村後澤附近	
德江	中田河岸	福島縣伊達郡富野村舟生附近	
中瀬	梁川河岸	梁川町	一二 籽
桑折	大枝河岸	大枝村	一三 籽
長岡	德江河岸	森江野村德江	一六 籽
瀬上	伊達崎河岸	伊達崎村道林	一八 籽
鎌田	中瀬河岸	保原町中瀬	二〇 籽
福島	上郡河岸	伊達崎村沖	二二 籽
	桑折河岸	桑折町南部	二四 籽
	伏黒河岸	伏黒村	二六 籽
	岡河岸	長岡村長岡	三〇 籽
	瀬上河岸	信夫郡瀬上町船場町	三二 籽
	渡利河岸	鎌田村舟戸	三四 籽
	福島河岸	福島市御蔵町	三六 籽
	天神河岸	信夫郡渡利村	

したものである。丸森は下川船區の限界で、諸貨物の積みかへ港である。
(2)上川船區(第二表参照) (註一)

註一 明治十四年十一月 回漕店集合

決議 運賃表

註二 寛文年間の川港は福島圖書館藏

書、川村瑞軒原圖寫に依る。

註三 近頃の出版物で福島の川港を舟

場町とせるものが御蔵町が主で

あつたことは古老の言によつて

も知れるし、明治二十年日本鐵

道會社福島驛設置に付き新市街

開殖圖」と云ふ扇面に描かれた

地圖に依ると御蔵町に回漕荷物

取扱所あり、舟場町にも荷物取

扱所としてあるが貨物の大倉庫

は御蔵町にあつた。例の瑞軒の

圖に依ると其處には大佛城の南

に家中宅があり御城米御蔵、上

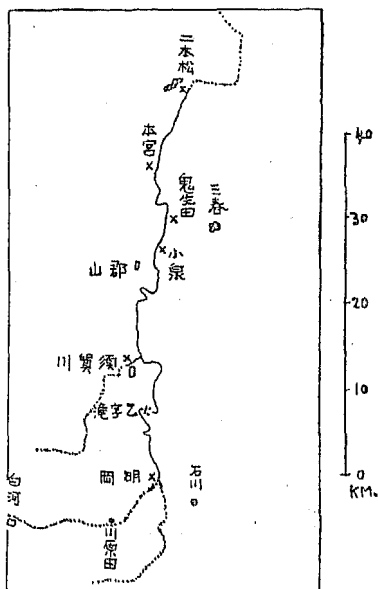
總屋三吉船會所、上杉彈正大彌

藏と順次南に並んで川に面して

ゐた。

(3) 上流部船路(第三表參照)

阿武隈川上流部の川港圖第三



第三表 上流部船路の川港 (明治十年以前?)

港名	現在位置	供中よりの川路距離
二本松	福島縣安達郡下村成田(黒塚附近)	一〇、五軒
本宮	本宮町	一九、〇軒
鬼生田	山部郡逢隈村	二三、五軒
小泉	水泉村	四五、〇軒
須賀川	岩瀬郡須賀町中宿	六二、〇軒
明間	西白河郡三神村明新	

(4) 阿賀川及其の支流等(第四表參照)

第四表 阿賀川及其の支流の川港 (明治十三年)

港名	現在位置	川口よりの川路距離
清水河岸	福島縣耶麻郡鹽川町(大鹽川)	一三五軒
堀切北河岸	〃 〃 堂島村會知(阿賀川)	一三一軒
山崎前河岸	〃 〃 應徳村山科(〃)	一二七軒
柴崎河岸	〃 〃 新郷村豊洲(〃)	九〇軒
德澤河岸	〃 〃 河沼郡群岡村德澤(〃)	八四軒
坂ノ下河岸	〃 〃 笈川村濱崎(日橋川)	一三五軒
大船戸・新港戸	新潟縣東蒲原郡津川町(阿賀川)	五八軒
小松河岸	〃 〃 下條村小石取(〃)	三六軒

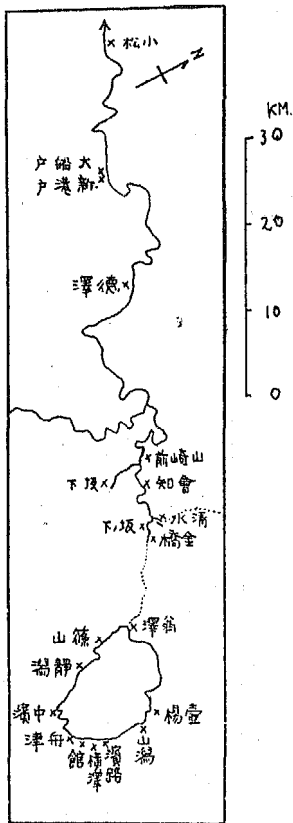
註一 該表は明治十三年福島縣統計に依る。

註二 明治二十一年福島縣統計に依る、耶麻郡駒形村金橋(日橋川)、全郡山部村(阿賀川)、河沼郡坂下町(鶴沼川)等も川港であつた。

註一 該表は運漕事務に關係した人、その他現地の古老により、船問屋の所在等も確め得たものを此處にかゝげた。鬼生田は三春の外港であつた。

註二 明治十三年福島縣統計 遭運斷立所所在地には須賀川本宮、二本松の三ヶ所だけ舉げてある。

圖 四 第



鮫川の川港は明治以前に於いて大島・鹿野・井戸澤等であつたらしい。

(5) 猪苗代湖の港(第五表参照)

第五表 猪苗代湖の港（明治十三年）

[illegible]

明治初期を中心とした福島県内の水路交通

河港の位置は地方中心都市及其れに連絡する上、都合の良い地點（福島保原に對する中瀬等）重要な交通路に面した聚村（小泉等）等に支配されてゐる。航行限界も福島等にあつては可航限界より

僅かではあるが、下流になつたと云ふ様な點にも人文的原因が河港位置決定に重要な役割をはたしてゐたことが理解出来る。川港聚落の發達は見るべきものが無い。鹽川清水河岸では倉庫（一六間位？）二棟間屋二・三軒であつたと云ふ。瀬上河岸には三間に六間の倉庫三棟店七軒の小聚落が有つた。問屋は河岸場から離れた町に存する例（保原・二本松等）もある。當時の宿驛が繁盛してゐた事を思ひ合はせて、是等の事は水運が陸運に比して、餘り重要性を有しなかつたことを示す。（阿武隈川上流部・阿賀川の津川・鹽川

間等特に然り)河岸場聚落は川缺・洪水に逢ひ易い氾濫原の或る種聚落と共に、現在荒廢村落の一系列に屬してゐる。

三、船

阿武隈川の下川船(全區の船)は三十石以上、上川船及び上流部の船は二十石積位のもので、下川船より小さいのは當然である。上川船は長さ五間、幅五尺^(註一)、長さ六間半、幅七尺位の大さきであるに對して、上流部の船は長さ五間、幅七尺で米四十八俵(四斗五升入)^(註二)を積み得たと云ふから大差なかつた。他の川のも大同小異であつた。船は何づれも帆を有する航海船^{コダインボネ}(小島飼船)で土地の者は別にチュウセン船と稱してゐる。急流部の遡航には麻繩が必要で、舟子が川岸に沿ふて造つてある道をたどつて、此の繩で船を曳き上げた。船の數に就いて第六表に表を掲ぐ。阿武隈川の上流部では組合組織で通船を初めた際に四十八隻の建造を行ひ、須賀川・明岡各に二十四隻づつ分けたと云ふ。又平貫八隻、角

第六表 河岸別船數

川	河岸名稱	明治十二年度 船問屋船數	明治十三年度 船問屋船數
阿武隈川	須賀川河岸	一	一
"	本宮河岸	一	一
"	二本松河岸	一	一
"	福島河岸	二	一
"	桑折河岸	一	一
"	中瀬河岸	一	一
"	徳江河岸	一	一
"	梁川河岸	二	一
大鹽川	清水河岸	一	一
阿賀川	堀切北河岸	一	一
"	山崎前河岸	一	一
"	柴崎河岸	一	一
"	徳澤河岸	一	一
堂島川	坂ノ下河岸	一	一
阿賀川	大船戸・新港戸	二一八	八五
"	小松河岸	八九	七六

田八隻、原町臺町二十四隻、丸森百二十八隻、沼上十隻、五十澤六隻、梁川六隻、福島八隻（外三隻は客船）あり等と云ふものが有るが、その時期・數の正否は未詳である。然し港勢の比較には概略利用出来る。

これ等の船は總べて貨物船である。

註一 宮下喜佐治 瀬上郷土教本 一四頁

註二 上流部船路の船頭だつた老翁の語に依る。

註三 長井政太郎 最上川の水運及び輸送物資に就きて。

地理學評論六ノ一〇 三三頁

註四 阿武隈川上川船區では船頭一人、舟子二人が乗組員で

船頭は船中に残り梶をとつた。全川上流部では船頭一人舟子一人であつた。此の相異は後に記述す。阿賀川では五人位乗組んでゐたと云ふ。三、四人かかりで曳き上げたのである。

註五 明治十二年福島縣統計、明治十三年福島縣統計 此の

外の縣統計には河岸別船數の記載なし。

（未完）

新著紹介

○歐亞點描 下田將美著 一元社發行 定價二圓八十錢

著者下田氏は大阪毎日の經濟部長として有名な方であるが昭和九年の春から夏にかけて歐亞各地を巡遊され、比律賓・セレベス・ジャバ・印度からイラク・シリアをへて土耳其に入り、バルカン諸邦を訪問して歐洲に出たところの世界新市場視察團の東道をされたときの土産話である。勿論本書はさうした經濟事情の研究を専門的に書いたのではなく、東邦の遊士がいかにかその遍歴した所に旅愁を感じたかといふ一篇の美文讀本である。従つて地理書ではないけれども、かうした感慨にみちた旅行記は筆者まだ嘗て讀んだことがない。セイルンにしても、ペルシャ灣にしてもイラクの沙漠の旅にしても、トルコでの追憶にしても、巻中いづこをみても、全くフレッシュな感じで珍らしく、さうして深く考へさせらるゝ地誌であるとの感にうたれる。集むる所は、夕闇のバルカン、古都バグダット、コロンボのフェルナンド君、賭博のジャワ、老人の家庭、白と赤、マニラの半嶽、珍魚デオロギー、苦熱のペルシャ灣、シリア沙漠を横切る、土耳其雜信、沈黙の塔ナチス清黨事件直後の伯林、シヤガタラ文の舊港、世界的二選手を偲ぶ、鰐を喰ふ、三百年前の日本地圖、ダマスクへ、密輸入物語、窮極を思ふ。といふ二十篇、いづれもアトラク